

## 2009年6月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

200 hPa 風速場で見ると、アフリカ北部からインド付近にかけて亜熱帯ジェットが南偏が顕著だった。これはチベット高気圧の発達が発達が遅かったことと関連している。北半球における高周波擾乱の活動は、活発域が全般に極寄りに位置し、平年より不活発な領域が多かった。500 hPa 高度場で見ると、高緯度で正偏差、中緯度では負偏差が卓越した。対流圏下層では、ロシア西部や東シベリアでは対流圏上層のリッジの発達に対応した顕著な高温偏差が見られ、中国でも顕著な高温となった。一方、西シベリアや中央アジアでは、対流圏上層のトラフや寒気をともなった地上高気圧の発達・南下により低温偏差が見られ、特に中央アジアの低温は顕著だった。

熱帯の対流活動は、南米北部や台風第3、4号が発生したフィリピン付近で活発、インド付近やインドネシア西部では不活発だった。対流圏下層では、インド洋西部でソマリジェットが弱く、インドモンスーンの循環が弱かったことを示している。また、北太平洋高気圧は平年よりも弱く、太平洋赤道域の東西風は西風偏差が卓越した。対流圏上層では、アフリカ北部から中東にかけて低気圧性循環偏差が分布し、チベット高気圧は西側で平年より弱かった。赤道季節内振動(MJO)に伴う対流活発な位相は、6月上旬から中旬

にかけて西部太平洋から南米、アフリカへと東進したが、その後東進は不明瞭となった。南方振動指数(SOI)は0.0と、平年並の値となった。

### 世界の天候

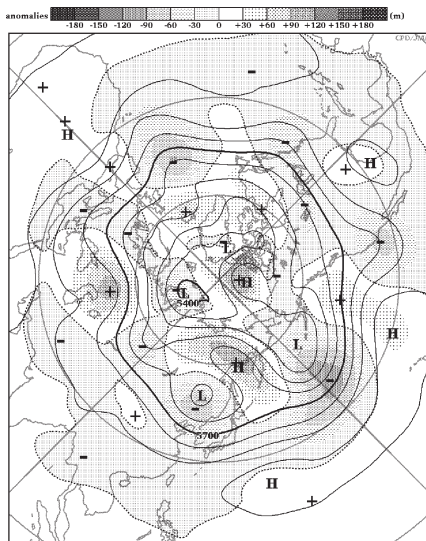
2009年6月の世界の月平均気温平年差は+0.36°Cで、1891年の統計開始以来、2番目に高い値となった。6月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.64°C/100年である。

- インドから西日本にかけては、異常高温となった。
- カザフスタン西部～中東では、高気圧の西側で南からの暖気の影響を受け、異常高温となった。
- 北アフリカ西岸では、平年より対流活動が活発で、異常多雨となった。
- 米国北部は、停滞前線の影響で、異常多雨となった。

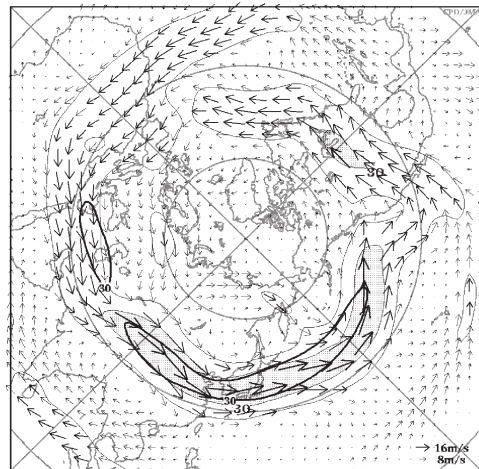
(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

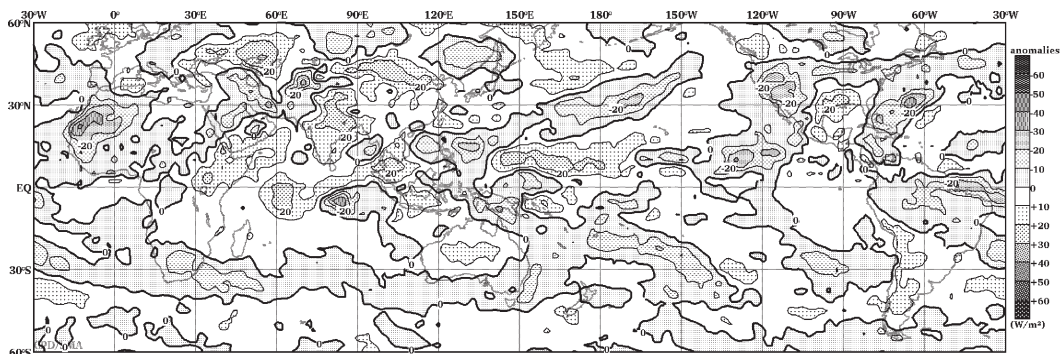
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



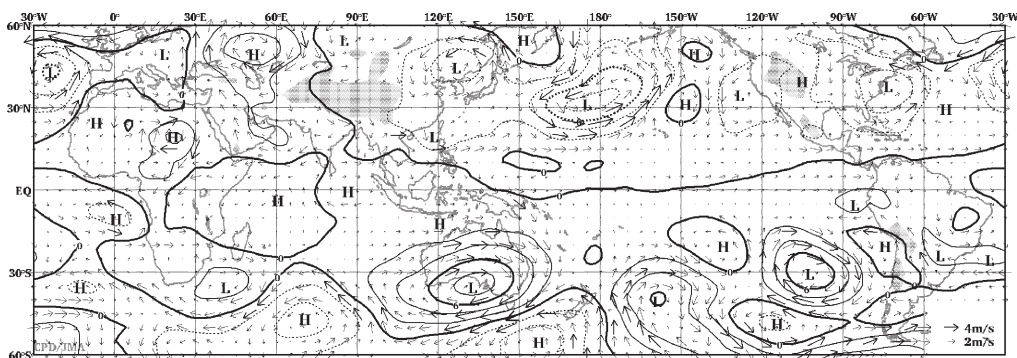
2009年6月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差  
等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1979～2004年のデータから作成。



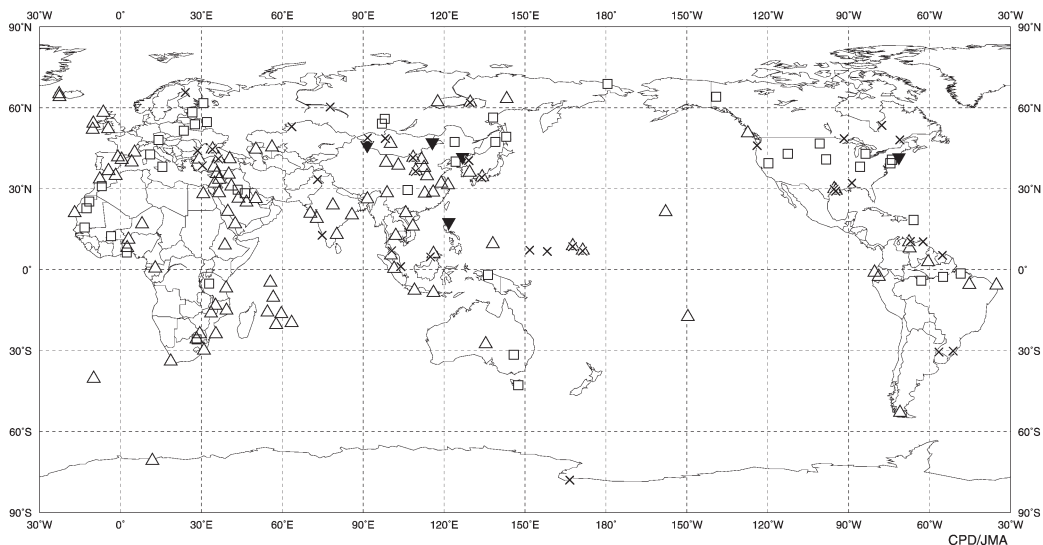
2009年6月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル  
等値線間隔は15 m/s。陰影部は30 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の30 m/s以上の領域を示す。平年値は1979～2004年のデータから作成。



2009年6月の月平均外向き長波放射量年平均偏差  
 等値線間隔は10 W/m<sup>2</sup>で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データはNOAA。平年値は1979~2004年のデータから作成。



2009年6月の月平均850 hPa 流線関数年平均偏差および風年平均偏差ベクトル  
 流線関数の偏差の等値線間隔は  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。平年値は1979~2004年のデータから作成。



2009年6月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。